

## 白粉入りの文書料紙に関する考察

高橋 裕次

文書料紙の表面を100倍程度の倍率をもつ顕微鏡で観察すると、繊維の間に白い粒状のものを発見することがある。この白い粒は、量に多少があるが、米粉、白土、胡粉などを紙漉きの過程で意図的に混入させたもので、ときには、刷毛などによる塗布や、修理の際の糊が料紙表面に付着している場合もある。料紙に米粉などを混入したり、胡粉等を塗布することは典籍などではすでに平安後期よりみられるが、文書料紙の場合、顕微鏡を用いての観察はこれまでほとんど行われておらず、文書料紙に米粉などを混入することの濫觴や、こうした紙の当時の呼称などは明かにされていないのが現状である。たとえば、『高野山文書』弘和四年（1384）二月九日天野社造宮料足結解状に初見する「肌好」や、『経覚私要抄』応永二十八年（1421）八月四日条に見える「薄白」は、米糊などを混入したものと考えられているが、当時の遺品は確認されておらず、おそらくはその名称や、近世の同名の紙の紙質などから白粉の混入が推定されたものと思われる。調査では顕微鏡によって白い粒状の物質の確認を行ったが、その物質が米粉、白土、胡粉のいずれに相当するかを直に判定するのは困難であることから、便宜上、以下これらを白粉と表現する。

調査によって、白粉の混入が認められたのは文書総数1796件のうち128件であり、年代の上限は長治二年（1105）九月十四日黒田庄大屋戸村徴使今犬丸解案、下限は元和七年（1621）六月朔日上杉景勝書状である。年紀のあるものについて作成年代別の内訳を（白粉入りの文書数）／（調査文書総数）で示すと、平安中期0／19、平安後期0／17、院政期30／150、鎌倉前期12／33、鎌倉中期2／95、鎌倉後期16／212、南北朝16／218、室町前期3／81、室町中期1／92、室町後期29／279、安土桃山3／42、江戸1／9、また、欠年文書について白粉入り文書数のみを示すと鎌倉6、南北朝3、室町6、安土桃山1となっている。

近世以降は白粉入りの紙が広く普及するにいたり、現在は越前奉書紙（白土）、美栖紙（胡粉）、宇陀紙（白土）、間似合紙（泥土）の他、近江雁皮紙でも特別に需用者の注文によって米粉入りの「糊入り」紙を作っていることが知られているが、今回の調査では少なくとも12世紀初頭の院政期には白粉を混入した文書料紙の存在が確認できる。

院政期の文書で混入が認められるのは、長治二年九月十四日黒田庄大屋戸村徴使今犬丸解案をはじめ、天永二年（1111）の二通の東大寺款状案、久安五年（1149）九月十二日弁官下文、永暦元年（1160）と治承五年（1181）の二通の伊賀国司庁宣案である。さらに永暦二年より元暦二年（1185）までの間に、東寺の後七日御修法僧交

名が25通とまとまっており、このうち23通に白粉が混入しているが、それ以前の同交名はすべて案文で白粉の混入はない。また鎌倉前期の文書33通のなかで白粉が混入していたのは、東寺の後七日御修法僧交名18通のうちの12通である。紙質はいずれも杉原紙で、なかには檀紙に近い風合いのものがみられる。これら鎌倉前期までの文書で白粉を混入したものの多くは、繊維溜りはあるが、墨にじみが少ないことから、白粉がサイジング料として用いられていた可能性もある。

鎌倉中期では、延応元年（1239）十二月宣陽門院庁下文（引合）、弘安二年（1279）四月十日六波羅召文御教書案（杉原紙）の二通のみに混入が認められ、料紙は共に0、25ミリ前後の厚さがある。東寺の後七日御修法僧交名は文永九年（1272）までに11通あり、いずれも白粉の混入はないが、それまでの後七日御修法僧交名が白粉入りで0、17前後の厚さであったのに対し、厚さが約2倍の0、3ミリ程度で墨にじみがみられないのは、厚さとともに繊維の密度が大きくなるような紙漉の方法がとられたためと考えられる。鎌倉後期は、正応三年（1290）二月二十二日名主職充行状案、延慶三年（1310）四月二日平野殿庄預所平光清書状（檀紙）、正和五年（1316）二月日大山庄住人藤原宗安申状（杉原紙）の他、正中二年（1325）二月四日執行殿伊書状（引合）、嘉暦二年（1327）三月二日六波羅御教書案や、現在の美栖紙の感じに近い嘉暦二年閏九月日東大寺衆徒等重申状案など十六通に混入がある。鎌倉中期以降は調査した料紙の数量が増加し、紙質も多様になるが、檀紙、杉原紙、引合と楮を原料としたいずれの紙にも白粉入りがみられることは、特定の紙に白粉が混入されたものでないことを示している。

南北朝期は、暦応二年（1339）七月十一日御室宮令旨（引合）、暦応五年三月二十八日二階堂成藤奉書（杉原紙）、暦応五年某算用状、康永四年（1345）五月十八日光厳上皇院宣案（檀紙）、観応二年（1351）六月六日足利直義御判御教書案、文和四年（1355）十月二十六日亮真寄進状（引合）など十六通で、公家文書、武家文書ともに白粉入りのものがみられる。

室町前期は三通で、応永十三年（1406）後六月十七日興福寺別当円尋書状案（杉原紙）や、白粉入りの奉書紙として永享二年（1430）三月二十七日山城守護代沙弥清貴避状などがみえている。中期は、わずかに寛正三年（1462）卯月日石作庄寛正二年年貢勘定帳（杉原紙）の1通であるが、後期に入ると、奉書紙の占める割合が多くなるにつれて、白粉の混入量が次第に増加しているのが特徴で、明応九年（1500）卯月十一日飯尾清房書状などの武家書状6通、永正六年（1509）五月二十六日付などの室町幕府奉行人連署奉書6通、永正六年十二月九日後柏原天皇綸旨や、売券、代官職請文なども奉書紙である。そこで、室町幕府奉行人連署奉書について検討してみると、寸法はおおよそ縦27センチ、横46センチで、白粉入りの有無による寸法などの違いは見られず、密度についてもほぼ同様であることが判明した。こうした奉書紙のなかで元和七年（1621）上杉景勝書状は裏に白土様のものが沈澱しているのは、白粉が多量に含まれていることを

示すとともに、簾目は裏、板目は表にあることから、この文書料紙は紙漉きの後、紙床に重ねることはせずに、干し板に直貼りされたもので、板目のついた面を料紙の表として書状を認めたと考えられる。

以上のように、白粉入りの文書料紙は、檀紙、杉原紙、引合、奉書紙など、楮を原料とした種類の紙にいずれにもみられるもので、院政期には登場しており、公家文書、武家文書に限らず、正文、案文のどちらにも白粉が混入されている。厚さは様々で、地色は黄色がかった白色のものが多く、時代が下がるにつれて白粉の混入量が増加している。白粉を入れることにより、紙が白くみえる、柔らかくなる、透けにくくなるなどの変化がみられるが、胡粉など炭酸カルシウム成分の混入は紙の酸化を遅らせるなどの効果があると思われる。

米粉を入れた紙を漉く方法は、生の米を水にしばらく浸けて柔らかくしたものを挽き臼ですって潰し、さらに袋で濾してできた汁を漉船の中の紙料に入れて使用するというもので、米を煮て糊状にしたものを使用することもあった。その理由は、米粉を入れることによって紙が白くなるとともに柔らかくなり、重さが増えるためといわれている。今回調査した中世文書では、白粉の混入による料紙の重さの違いがさほどみられなかったのは、白粉の混入量が比較的少ないことを示していると考えられる。典籍料紙などでは、平安時代後期の装飾料紙において主原料である雁皮繊維に対して米粉が1：1以上の割合で混入している例がみられるのであり、文書料紙の白粉混入については、混入量の変遷を生産地や用途などの観点から検討することが必要となろう。

近年、上島 有氏は、中世文書の料紙を材料・漉き方から奉書紙・美濃紙・斐紙の三つに大別し、さらに引合・檀紙・奉書紙は広く奉書紙に含まれるとした上で、中世文書の料紙は①奉書Ⅰ、②奉書Ⅱ、③檀紙、④奉書Ⅲ、⑤宿紙、⑥美濃紙、⑦斐紙、⑧その他の雑紙に分類できるとしている（『中世文書の料紙の種類』『中世古文書の世界』小川信編、平成3所収）。つまり中世の公文書のほとんどは奉書紙で、これに対して美濃紙は白土の入っていない紙であり、「透かしてみれば白土が入っているのかそうではないのか、ほとんど完全に区別することができる」とする。

しかし、白土などの混入の確認は、100倍程度の倍率をもつ顕微鏡によるか、あるいは紙そのものを破壊しなければ不可能であり、白土か米粉かを判断するためにはC染色液などの使用が必要になる。また美濃紙については、明治初期までは、紙の面を密にして白色度を付与するために、米粉を加えていたことが知られている（内木 茂「美濃紙の製法と道具」『美濃紙 その歴史と展開』澤村 守編 昭58所収）。文書料紙の分類は重要なことであるが、そのためには、実際の文書料紙について総合的研究を進め、文献史料と比較検討することによって、今日残されている文書料紙のなかから当時の美濃紙などを確定していかなければならないのであり、現在の抄紙技術をもとに安易な分類を行うことは、徒らに混乱を招くものであろう。

ところで、一般に杉原紙は、近世に米糊を加えて色を白くしたところから、糊入とも呼ばれたと考えられている（『和漢三才図会』『貞丈雑記』）。これに関連して、寿岳文章氏は、中世の杉原は糊を入れず、檀紙・引合の面影を保持していたとし、さらに『宗五大艸紙』にみえる引合と杉原の並記は、引合の紙質が杉原に近かったことを想わせ、そして杉原はまた、後代の奉書紙に接近してゆくという示唆に富む発言をしている（『日本の紙』）。従来、中世の杉原紙についての評価は、『貞丈雑記』などの文献によることが多く、文書原本にあたっての検討が行われていなかったため、「糊入」の起源がどれだけ遡れるかといったことには注意がはられなかったといえる。しかし、今回の調査結果にみえるように、中世の杉原紙には、檀紙、引合、奉書紙などとともに白粉を入れたものが存在することが明かであり、中世の杉原は糊を入れなかったという認識は改められねばならない。

なお、手元にある江戸時代の白粉入りの越前奉書紙のサンプルを実験的に湯水にしばらく浸しておいたところ、混入されていた白粉が溶け出し、色は白から淡褐色になり、透明度が増した反面、紙を透かすと簾目が見えにくくなっているという結果を得た。これは白粉入りの文書料紙が水分を多く含んでいる状態で熱を加えることの危険性を示すもので、とくに水を使用した修復の際には留意すべき点であるといえる。和紙の繊維が熱の影響を受けるとたやすく劣化することはあまり知られていないが、混入される白粉もまた熱によって溶け出すことがあることを知っておく必要がある。また、この実験で白粉の溶け出した紙を光に透かしてみたとき、杉原紙の透け具合と同じ様な感じをうけたのが印象的であった。中世の杉原紙と奉書紙には技術的に何等かの関連があると推定されるが、杉原紙や鳥の子紙が盛んに用いられるなかで、奉書紙や間似合紙が普及してくる背景には、白粉の混入量が次第に増加してくることが大きく関係していると考えられる。